

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520115

研究課題名(和文)プロティノス美学におけるアイステーシスの機能 プラトン思想の受容と変容を中心に

研究課題名(英文)The function of aisthesis in Plotinus' aesthetics

研究代表者

関村 誠 (Sekimura, Makoto)

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：20269583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：プロティノスにおけるアイステーシスの機能の明確化とその意味づけに努め、アイステーシス論が哲学的思索の中に組み込まれていることを示した。感性的な諸局面の議論に関して、プロティノスがプラトン思想をいかに解釈して引き継ぎ、あるいはいかに独自展開しているかを、両哲学者のテキスト批判を遂行して見極めることを試みた。その結果、アイステーシスのある種の働きが「判断」に連係して哲学構造に組み込まれて、感性と知性とを結びつける積極的な面をもつことを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to clarify the function of sensation in Plotinus and analyzed his theory of aisthesis, which is integrated into his philosophical structure. Through the critical reading of texts, I confirmed that Plotinus interpreted Plato's thought and that he developed his own theory concerning the function of sensation which is dynamically connected to intellectual judgement. In this way, I have sought to re-evaluate the significance of aisthesis in Plotinus' aesthetics.

研究分野：美学

キーワード：プロティノス 感覚 感性

1. 研究開始当初の背景

(1) 今日、「感性論」として捉え直す必要に迫られている美学という学問において、プラトンからプロティノスへの影響と展開については詳細には議論されてはならず、その考究は未だ充分ではない。感性論の源流からの展開としてプラトンとプロティノスの関係を見らるとい立場からアイステーシス(感覚、aisthesis)にかかわる議論を考察を深めていくとき、これまでとは異なった研究のアプローチができ、美学的問題をめぐってのプロティノスのプラトン読解の意義とプロティノス自身の思想発展とを新たな観点から見直すことができる。これまでは、ギリシア古典の解釈をもとにした美学理論は美や模倣概念についての考察が中心であった。しかし、こうした「感性論」あるいは「感覚学」の立場から、古代ギリシア、とりわけプラトン、アリストテレスやプロティノスのアイステーシスに関わる議論を精査することによって、感性的経験を基礎づける理論、ひいては、古典芸術には還元できない現代芸術の特性をも明らかにする理論へ寄与しうる諸要素を引き出すことができると確信する。アイステーシスという概念の思想的な意味付けをめぐって、美学の「原点」としてのプラトンからプロティノスへの影響と展開についての考察を進める必要がある。

(2) また、近年、左近司祥子氏、樋笠勝士氏らの国内研究に加え、ブリッソン(L. Brisson)を中心とする研究者がプロティノスの全論文の詳しい注釈つきの仏訳の刊行を完成し、それぞれの論文ごとの注釈・研究書も、英語圏に加えて、仏語圏においてもCerfやVrinなどの出版社から刊行され、プロティノス研究は国内外で高まりを見せている。また、プロティノス思想において感覚界のもつ意義に関しては、ムツソプーロス(E. Moutsopoulos)などの先行研究がある。その結果、それら先行研究を参考にしつつ、とりわけ、最近複数出版されたプロティノスの論文「美について」の詳細な注釈書をたよりに精読を遂行することにより、プロティノス美学におけるアイステーシスの機能の研究をプラトンとの比較のもとに新たな観点から遂行することが十分に可能な状況となってきた。

(3) 申請者は、これまで、プラトンの美学を中心に研究を行ってきており、プラトン思想における感覚論の位置づけについて、考察を遂行してきた。そのプラトンに大きく影響を受けているプロティノスの議論を、プラトン思想との関連で研究し、プラトンから受け継がれている面と、プロティノスの独自性とを明確にすることにより、一定の成果を期待することができる。プラトンとプロティノスは、プラトン主義の伝統で継続性があるとはいえ、歴史的展開を追うためには、両者の間にあるアリストテレス、ストア派などの思想の検討も必要である。プロティノスの思想も

新プラトン主義の流れのなかで読み解かれるべき側面を有している。それも視野に入れつつも、とりわけ、アイステーシスの議論の観点から、プラトンからプロティノスへの受容・変容と新たな展開とを明らかにする研究が必要であると考えた。

2. 研究の目的

(1) プロティノスはプラトンの対話篇の独自の読解に度々依拠して自らの美学思想を展開している。このプロティノスにおけるアイステーシスの機能の明確化とその意味づけに努める。感性的な諸局面の議論に関して、プロティノスがプラトン思想をいかに解釈して引き継ぎ、あるいはいかに独自展開しているかを、両哲学者のテキスト批判を遂行して見極めることが本研究の目的である。その中でプラトンの思想の再吟味も行う必要がある。アイステーシスのある種の働きが知的「判断」(krisis)の機能に連係して哲学構造に組み込まれる積極的な面をもつことの解明は、「感性論」としての美学の源流と、プラトンからプロティノスへと至る初期的展開の理論的基盤をより堅固なものにするともに、感性に関わる現代的反省の拠り所の一つとすることができる。

(2) アイステーシスという語をイデア論を含む形而上学的思索の構造に積極的な仕方で組み入れようとした思想伝統の原初的展開におけるプラトンとプロティノスの関係と彼らの思想展開とを新たに読み解いていく。「美」についての論文の解釈から「徳」や「浄化」の概念の位置づけを見定めた上で、とりわけ、プロティノスがアイステーシスを二種類に分けていることが見られる議論の分析と意味解釈を遂行し、また「徳」や「浄化」の概念がそこにいかに結びついて理論構築がなされているかを考察する。それによって、アイステーシスの機能が、「情念」(pathos)に起因しそれに左右される面がありながらも、「判断」に繋がって、それを含みもつ積極的機能を有することの解明を試みた。

3. 研究の方法

(1) プロティノスのギリシア語原典の分析検討を基礎にして、近年英語、フランス語およびその他の言語で多数公刊されている各論文ごとの注釈書なども参考としつつ、プロティノスにおける哲学的営みに組み込まれているアイステーシスの機能をその動態において明確にすることに努めた。その際に、プロティノスが参照しているプラトンのテキストもあわせて解釈し、そこから受け継いでいるものとプロティノスが独自に発展させたものとを明らかにすることを試みた。

(2) プロティノスの第1論文「美について」を主たる考察対象として、テキスト分析を行った。その際に、「徳」(areté)、「浄化」(katharsis)、「類似」(homoiōsis)などの概念

と「美」(kalon)との関連性の問題意識を見た上で、「徳」、「類似」に加えてアイステーシスも二種類に区別されていることを考察し、アイステーシスと知性的な能力との力動的な関連性を浮き彫りにすることに努めた。また、第19論文「徳について」や第53論文「生命あるものとは何か、人間とは何か」において、上記の「美」についての論文でも見られた「徳」、「浄化」、「類似」などの概念の扱われ方を考察し、プロティノス思想におけるアイステーシスの位置づけとその意味とをさらに検討した。その際、考察のポイントとして、プロティノスが、「徳」、「類似」、またアイステーシスを二種類に区別していることに(単純な図式化にならないよう注意しつつ)着目してテキスト分析を遂行した。

(3) プラトンのテキストは、プロティノスが論文「美について」において依拠している『パイドン』の再解釈を試みた。プロティノスの「美について」とプラトンの『饗宴』や『パイドロス』とのつながりは明らかであるが、本研究では、「浄化」の概念がいかに関係しているかを明確にするために『パイドン』との関連性の考察を遂行した。

(4) 西洋近代の二元論を超える可能性を有するギリシア思想の一面を明らかにするために、同様に西洋近代との異なりを自覚する立場にたった日本の思想との比較考察も行った。

4. 研究成果

(1) プロティノスの論文「美について」において、感覚論が浄化の理論と関連しており、浄化の議論とイデア論との関係が見られるプラトンのとりわけ『パイドン』から引き継いでいる問題を分析・検討することができた。プラトンからプロティノスへのアイステーシス論の原初的展開をテキスト批判を中心として解釈することは、感性論あるいは感覚論としての美学の原点回帰的復権という現代の学問的営みを、まさにその原点から支えるための一助とすることができた。これまでの美学の研究分野ではあまり考察対象にされてこなかったプロティノスの論文や「浄化」などの概念に新たに光を当てて、美や感覚についての議論との関係を探ることができた。アイステーシスの機能が、単に付随的な局面のみを有するのではなく、哲学構造の根幹に組み込まれていることの明確化は、プロティノス思想における感性的な働きの従来の位置づけに対する評価をより引き上げることになり、その積極的な意義を理解することが可能になると確信できた。

(2) プロティノスの美についての理論における浄化に関しての言及との関連でプラトンの『パイドン』の浄化についての議論の位置づけを考察した結果、浄化作用を感覚機能の哲学への統合と矛盾することなく理解するという解釈を展開することができた。肉

体の魂への影響を否定的に見なしながらも、感覚機能の働きを積極的に捉える思想をプラトンとプロティノスが有している点について考察することができた。

(3) プラトン哲学から受け継いでいる美の思想の中で、プロティノスが感覚論をより発展的に分析して、肉体に関わる感覚と知的判断に繋がっていく感覚とを区別しており、その点においてプロティノスが感覚の機能について慎重な議論を展開していることがわかった。

(4) プロティノスの感覚には、知性的な働きと連動して働く側面も見ることができ、感性と知性とを明確に分けて区別する二元論的思想解釈では捉えきれないダイナミックな思想構造の一部を解明することができた。プロティノスにおける感性の働きは知性に比べて単に低い段階に置かれながらも、それがいかに知性的「判断」に繋がっていくかという動態のもとに考察を深めるとき、人間感性や感覚に関わる芸術の現代的反省の基盤の一つとすることができるとの確信をもつことができた。

(5) プロティノス思想の中で感覚機能は、さらに広く、形を自覚的に把握する働きとも関連していることが強く意識された。また、知性界の中での感覚に言及するなど比喩的に感覚に言及する場合があります。いっそう網羅的にプロティノスにおける感覚論を彼の魂に関する議論との関連で明確にしていく必要があるとわかった。これらのことは、今後の研究課題として意識された。

(6) 研究成果を国内・国外の研究者の集う学会等で発表することで、上記(5)の点など有益な示唆を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 7件)

関村誠、「La question du sujet entre l'Occident et le Japon (Plotin et Watsuji)」(「西洋と日本における主体の問題、プロティノスと和辻」), Table ronde organisée par La Renaissance Française (ルネサンス・フランス主催シンポジウム), Rome, sur le Palatin, 2014年11月29日, Eglise San Sebastiano, via di S. Bonaventura, ローマ(イタリア)

関村誠、「プロティノスにおける感覚と浄化 プラトン思想の受容をめぐって」, 第21回新プラトン主義協会大会, 2014年9月21日, 大阪府立大学, 大阪

関村誠、「Possibilité et impossibilité de la faculté sensitive chez Plotin」(「プロティノスにおける感覚能力の可能性と不可能性」),

XXXVe Congrès de l'Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française(フランス語哲学連合第35回大会), Rabat, Maroc, ラバト(モロッコ)

関村誠、《 L'advenir et l'apparition de la beauté chez Platon 》(「プラトンにおける美の到来と顕現」), The 23rd World Congress of Philosophy (第23回世界哲学会), 2013年8月8日, University of Athens, School of Philosophy University, アテネ(ギリシャ)

関村誠、《 L'action poétique et la purification dans la théorie de la beauté chez Plotin 》(「プロティノスの美の理論における創造行為と浄化作用」), Colloque international « Poétique, Mythes et Croyances 》(学会「詩学・神話・信仰」), 2013年6月15日, Université Libre de Bruxelles, ブリュッセル(ベルギー)

関村誠、《 Le statut des artisans dans la cité platonicienne 》(「プラトンの国家における職人の位置づけ」), XXXIVe Congrès de l'Association des Sociétés de Philosophie (フランス語哲学連合第34回大会), 2012年8月23日, Université de Louvain, ルーヴァン(ベルギー)

関村誠、《 La divinité et la purification dans la cité platonicienne 》(「プラトンの国家における神性と浄化」), Table ronde : “La citoyenneté et la philosophie de la religion”, XXXIVe Congrès de l'Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française(フランス語哲学連合第34回大会、シンポジウム), 2012年8月23日, Université de Louvain, ルーヴァン(ベルギー)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関村 誠 (SEKIMURA MAKOTO)
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：20269583

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：